

県内製造業

省人化が拡大中

県内の製造業で最新技術を活用した省人化が広がっている。工作機械の導入を進めて働きやすい環境を整えたり、クラウドサービスの活用で受注業務を見直したりといった動きがある。また、製造設備の異音を人工知能（AI）が検知するシステムを開発する企業も。現場の人手不足が深刻化する中、生産性向上に向け模索が続く。

（報道部・田中信太郎）

経済SCOPE スコープ

は、聞き間違いや情報の入力ミスが発生することもある。クラウド事業を手掛けるウフル（東京）の支援を受けて、大手クラウドサービス

「営業担当が本来の業務に専念できる環境になった」とメリットを語る。

製造業のDX化に向けた技術開発も進む。システム開発のトラスト（小千谷市）は、設備不良をAIが音から検知する「Otomoni（オトモニ）」を開発した。

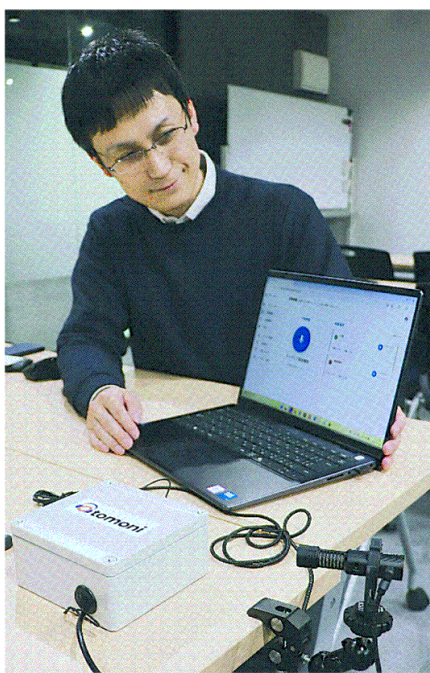
利用を想定するのは、自動車や産業機器部品などの製造現場だ。監視したい設備のそばにマイクを設置すると、正常な動作音をAIが学習。そのパターンから外れた音が出た場合に「異常」を知らせる。クラウドサービスの活用で、現場にいらなくてもスマートフォンなどで確認することもできる。

設備不良に対しては、熟練した職人の耳に頼るケースが多いのが現状だ。判断のふれや、作業の属人化により担当者の負担も大きい。製造ラインの停止は損失にもつながるため、DXのニーズは高いという。

サブスクリプション（定額利用）での利用を見込み、2026年に県内企業への本格導入を進める考えだ。本体は小型で設置に特別な工事は必要ない。品田拓朗副社長は「中小企業が手頃に導入できるようにしていきたい」と話している。



①新たに導入された工作機械を点検するアサヒプレジジョンの社員＝長岡市
②製造設備の異音をAIが検知する「Otomoni（オトモニ）」＝新潟市中央区



精密切削加工で音響機器や光学顕微鏡、医療機器部品などを製造するアサヒプレジジョン（長岡市）は今年10月、約3千万円を投じて最新鋭の工作機械を導入。加工された部品をロボットアームで取り出すことができ、これまで人の手で行われていた作業が簡略化される。

アサヒプレジジョンは製造業の「3K（きつい、汚い、危険）」のイメージを取り払おうと、工場内の清掃強化や作業の自動化を進めてきた。製造業は女性社員が少ないとされるが、現在は従業員約60人のうち、およそ5割が女性

金属製品製造の遠藤製作所（燕市）は、ゴルフ用品の自社事業「エポングolf」で、受注業務のデジタルトランスフォーメーション（DX）を進めている。顧客ごとに仕様が異なるゴルフ用具。特に電話での受注

女性比率増へ最新機械

AI導入し属人化回避

環境整備し生産性向上へ